英米文化の背景「英米人の迷信・俗信」考（14）
Ⅳ　年中行事―その３　灰の水曜日・母親訪問日・
エンドウ豆の主日・しゅろの主日・
王室行事の洗足木曜日・聖金曜日・大祝日の復活祭

藤高　邦宏
倉敷芸術科学大学生命科学部

（2005年９月30日　受理）

はじめに

いずれの文化においても、人々の日々の暮らしは単調になりがちである。その単調さにリズムをつけ、人々の心と体に活力を与え、彼らを取り巻く自然の恵みと彼らを見守ってくれる神に感謝を捧げようとして、人々は諸祭、諸行事を催す。

今号では、３月から４月にかけての、四旬節［前号の続き］の灰の水曜日やエンドウ豆の主日その他の諸祭、聖週間の聖金曜日等の祭儀、及びキリスト教徒の大祝日である復活祭までを取り上げる。それらの習慣と伝統、およびそれに纏わる多様な迷信、俗信について、若干の文芸用例をも加味しながら考察を試みたい。

下記は、復活祭 Easter に向けての諸祭と諸行事の概要まとめである。

<復活祭（春分３月21日頃以降の満月後の最初の日曜日）に向けての諸祭と諸行事>

- 四旬節 Lent……復活祭前の40日間の節制、禁欲の期間
  - 懺悔火曜日 Shrove Tuesday（パンケーキ・デイ Pancake Day）……Lentの前日
  - 灰の水曜日 Ash Wednesday……Lentの初日
  - 母親訪問日 Mothering Sunday……Lentの第４日曜日
  - エンドウ豆の主日 Carlings Sunday（Passion Sunday）……Lentの第５日曜日
  - しゅろの主日 Palm Sunday……Easter直前の日曜日
- 聖週間 Holy Week
  - 聖木曜日 Maunday Thursday……Easter直前の木曜日
  - 聖金曜日 Good Friday……Easter 直前の金曜日
- 復活祭 Easter

1　節欲の四旬節　Lent

［前号で既述］四旬節とは復活祭前の節欲の40日間を指し、キリストが荒野で過ごした40日間の断食と黙想の修行を記念する期間である。

(1)　懺悔火曜日　Shrove Tuesday……Lent の前日

［前号で既述］四旬節前日に人々は懺悔をし、肉・卵等で焼いたパンケーキを食する。

(2)　灰の水曜日　Ash Wednesday……Lent の初日

中世の初期には、懺悔の粗着を着けた悔悟者の頭上から灰を降り注いで、罪を清める行事が行われた。これは多少修正されてローマ・カトリック教会や一部の英国国教会で今もなお行われており、前年のしゅろの主日 Palm Sunday で使われたシュロを焼いて祝別した灰を用いて、信者の額の上に十字が切られる。英国国教会では悔い改めない者への戒めに「神罰の告知 Commination」、つまり「罪人に対する神の怒りと裁きの告知」が厳粛に読まれる。この告知文は俗に「呪いのことば the Cursing」と称され、このため灰の水曜日は「呪いの祭日 Cussing Day」の異称で呼ばれるようになった。Commination は英国国教会の『祈祷書』のなかにあり、罪人に対する神の怒りを述べたもので、Cursed is he... で始まる文章が数多く見られる。

しかしながら、俗間の人々の行う行事は宗教上の意義とはほとんど関係がないとされ、例えば、かつてはよく行われた行事であるが、イスカリオテのユダ Judas Iscariot をかたどった人形を燃やしたり、突き刺したり、あるいは皆で虐げるなどする行事や、ヨークシア州の若者たちは cussing を kissing と取り違えて翌々日を「キスの金曜日 Kissing Friday」と銘打ち、だれかれとなく女性にキスを迫る行事を楽しんでいた。

一方、サセックス州やハンプシア州では、子供たちが灰ではなく、

☆「花のついたトネリコの小枝を持ち歩き、小枝を持っていない子供をいじめる風習があった。」これは今日でも時折見られるものである。

この日の伝統的な食べ物としては、サマセット州ではAsh が Hash（細切れ肉）と混同され、主婦たちが細切れ肉の料理を作る慣習がある。また、肉を食べてはならない四旬節の初日にふさわしく、牛乳と小麦粉とシロップを簡単に混ぜ合わせた即製プディング（イングランド中部諸州）や、練り粉を揚げたフリッター（イングランド北部地方）や、ベーコンの脂で炒めた豆料理（ウォリックシア州）などがある。

☆「灰の水曜日に灰色のエンドウ豆を食べれば、一年中財布にお金を持っていられる。」

その他、この日の天候に関しても次のような言い伝えがある。

☆「灰の水曜日に風が吹くところはどこであれ、四旬節の間中風が吹き続ける。」

(3) 母親訪問日 Mothering Sunday……Lent の第４日曜日

四旬節の第４日曜日は「四旬節中日 Mid-Lent」とか「息抜きの主日 Refreshment Sunday」とも称される。後者については，この日に読まれる聖福音が、5000人の男たちにパンと魚を与えて満腹させたイエスの奇蹟に関するものであることを記念して、この日は四旬節の節制と断食の務めが多少緩和されたことに基づいている。しかしながら、四旬節のこの日の呼称として最もよく知られるのは「母親訪問日 mothering Sunday」であろう。この由来については、これまで不明確であるとされ、中世にはこの日に大聖堂や「母教会 mother churches」に詣でたからとか、この日が聖母マリアのお告げの祝日、つまり神の母 Mother of God の第一の祝日に近い日に当たるから等の説がある。この日が母親に関する祝日として祝われるようになったのは17世紀中葉になってからとされる[1)]。その当時には「子供たちは親元に帰り、ごちそうを食べた」とされる。この慣習は、恐らくその発祥地と言われるイングランドの西部地方の中心地ウスターWorcesterをはじめとして、ランカシア州、デヴォン州に至る広い地域で見られた。故郷を離れて暮らす子供たちはもちろん、奉公人たちも皆親元に帰った。家族が全員揃うと、教会の礼拝式に出かけたあと、家庭で伝統の料理「子羊と子牛の料理」を皆で分け合って食べたとされる。

里帰りにおける目的の一つに母親への「小遣い銭」や「飾り物や食べ物のプレゼント」がなされたが、当時最も好まれた食べ物のプレゼントは「シムネルケーキ simnel cake」であった。simnel は、特別な行事の際に上質の小麦粉で焼いたパンを意味する中世のラテン語 *simnellus* に由来する[2)]。

このケーキは衰えることなく、今日においても続いているが、母親訪問日の慣習の方はヴィクトリア朝中期に最盛期に達した後、衰退の一途をたどり続け、20世紀の半ばまでには、ほとんど消滅の状態であった。ところが、第二次世界大戦以後、至る所でこの行事が行われ始め、その状況は今日にも続いている[3)]。

これには、アメリカの「母の日 Mother's Day」がイギリス国内に浸透したことが絶対的原因であろう。これは５月の第２日曜日に行われるものであるが、大戦中にアメリカ軍兵士の習慣が海を越えてイギリスにもたらされたものである。これが旧来の母親訪問日と混ざり合い、後者がよみがえった格好である。多くの点でアメリカの影響を受けながらも、イギリスの母親訪問日が、今もなお昔通り四旬節の中日の日取りを堅持している点は、国民の誇りを感じさせるものがある。

(4) エンドウ豆の主日 Carlings Sunday (Passion Sunday) ……Lent の第５日曜日

この日はキリストの受難 sufferings（ラテン語の*passio*）を記念して「御受難の主日 Passion Sunday」が本来の名称である。別呼称については、この日が「悲しみの日」であることからイングランド北部やスコットランドでは、「悲しみ」からCare Sundayとか

Caring Sundayとか、あるいはCarling Sundayと呼ばれており、さらに意味の転移が生じて「エンドウ豆 Carlings」との結びつきから「エンドウ豆の主日 Carlings Sunday」になったのではないかとの有力な説がある。実際上、これらの地方では豆料理を食べるのが習慣であり、今でもその伝統が守られている[4]。

エンドウ豆は保存食品として貴重な物であり、四旬節の精進の食べ物としてもうってつけの食品であったと考えられる。エンドウ豆の調理法については、金曜日に一晩水に浸しておき、土曜日にベーコンと一緒に煮込み、日曜日に塩と酢で味付けするのが一般的のようである。

(5) しゅろの主日 Palm Sunday

復活祭 Easter 直前の日曜日のこの日には、教会で、キリストが受難を前にエルサレムに入られたことを記念する行事が行われる。慣例に従ってしゅろの主日の賛美歌、All Glory laud and honour と Ride on, ride on in majesty が歌われ、シュロの葉で作られた十字架が祝別されて会衆に配られ、礼拝式の間、行列を組んでこれを捧持して歩く。

シュロの枝葉は、この日にイエスを迎えたエルサレムの群衆が道に敷いて祝ったと言われるが、英国ではその故事の象徴としての本物のシュロの葉が用いられたことはまれであるとされる。英国ではこの植物は育たないことがその理由とされるが、これに代わって用いられたのは、主として「英国のシュロ」と称され早春に花穂を着けるヤナギ(ネコヤナギ)であった。かつてこの日には朝早くから野外に出かけ、ヤナギの花穂で帽子を飾り、幸運のお守りとされる「ヤナギの十字架」を持って帰ってきたものであった。しかし今日では、この慣習はほとんど廃れてしまっている。

☆シュロップシア州の Pontesbury Hill の丘の上では、「シュロ探しのほかに謎の『黄金の矢探し』がなされる。」

☆「霊が宿るとされるイチイの木から、この日最初に切り取った小枝は、幸運をもたらすためのお守りになる[5]。」

☆「しゅろの主日に花その他の種を播けば、2倍の花や実りがある」と言われる[6]。

(6) 王室行事の洗足木曜日　Maundy Thursday; Royal Maundy

四旬節 Lent の最後の一週間は復活祭直前の週であり、聖週間 Holy Week と呼ばれ、この間に二つの儀式が行われる。一つは洗足木曜日の儀式であり、もう一つは聖金曜日 Good Friday [次の項(7)で記述] の諸行事である。

洗足木曜日は、それが王室による行事という点で一般の祭りとは異なる性格をもつ。英国王は遅くとも13世紀以降、貧民の足を洗い、また彼らに食物、衣服、金銭を贈る行事を伝統的に行ってきたと言われる[7]。

この行事のルーツは、「イエスが最後の晩餐の時に席から立ち上がり、弟子たちの足を

洗い、弟子たちに向かって、相互の愛と謙遜の証として互いに足を洗い合うべき」と命じられたことにあるとされる。その晩ユダが出ていった後、イエスは弟子たちにさらに告げられたという。「われ新しき誡命（いましめ）を汝らに与う。汝ら相愛すべし。わが汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし[8)]。」イエスのこの誡命 commandment（ラテン語では *mandatum* で、Maundy はこれに由来する）を守り、イングランド国王はこれに従ってきた。歴代の国王はその年齢と同じ人数に、さらに翌年の洗足木曜日までの一年間を表す１名を加えた人数の貧民を対象者として選び、その足を洗い、それと同じ枚数のペニー貨をめいめいに、また魚とパンの四旬節の食事と一杯のワイン、衣服用生地、及び靴と長靴下を与えた。特に最も貧しい者には国王が洗足式に着用した外衣か衣服が下賜された。しかしこの最後の施しに関しては、エリザベス一世 Elizabeth I はこの慣例に従わず、代わりにそれに見合う物を貧者一人ひとりに贈ったと言われる。その理由は女王の衣服への強い愛着のためか、あるいは実用性を重視したためであったのか不明とされている。

女王は貧者たちの足を洗い、洗った足に口づけさえもしたとされるが、実は女王の前に３人の係りが洗足することになっていたとされる[9)]。

現在の洗足式では、かつての古い行事は行われないが、その名残として主だった参列者が強い芳香の花束（本来は貧者の足の悪臭を消すため）を携行し、施物官が洗足式中リンネルのタオルを携える慣習が守られている。今日では、洗足式は４年目ごとにウェストミンスター寺院で、その間の３年間は各地の主要な教会で場所を変えて行われる。今日の式では、人数はエリザベス女王の年齢よりも男女それぞれ一名ずつ多く、全員65歳以上で教会や地域社会のために長年奉仕活動を続けている人々の中から選ばれる[10)]。

祈祷とヨハネによる福音書の中の適切な一説の朗読が終わると、はじめに女王から３ポンドの貨幣が入った革の財布が各人に手渡される。これは往時の衣服の贈り物に代わるものであって、財布の色は女性は緑、男性は白である。続いて、マタイによる福音書からイエスの山上の説教 Sermon on the Mount の一節が読まれる。その後、女王は男性の列と女性の列の前を歩きながら、一人ひとりに２番目の贈り物である赤と白の２種類の財布を下賜される。赤の財布には通常の貨幣の１ポンドと１ポンド50ペンスがはいっており、前者の金額は「国王の衣服に代わる額」であり、後者のそれは「飲食物費」とされる。もう一方の白い財布には、「洗足日救済金 Maundy Money 」と呼ばれる施し金が入っている。これは特別に鋳造された銀貨で１ペニー、２、３、４ペンスの４種類からなるが、これを組み合わせて女王の年齢に相当する金額が用意される。つまり４種１セット=10ペンスを女王の年齢の10歳分とし、必要なセット数を揃え、10歳未満分は１ペニー貨が当てられる方法である。これは法定通貨であるが、どうやらこれを通貨として使用する者はほとんどいないようである。

なおこの特別鋳造の銀貨は、施物官につき従い、かつての貧者の洗足の名残から、足の臭いを消すための意の香りの強い小さな花束を携える役目の４人の子供たちにも贈られ

る。こうした子供たちは孤児院や貧困家庭から選ばれるが、彼らにも銀貨の贈り物の他、経済的援助が与えられると言われる[11]。

(7) 聖金曜日　Good Friday

聖金曜日は神の金曜日 God's Friday とされ、イエスの磔刑での死を記念する日であり、教会暦上で最も厳粛な祭日とされる。一般に教会では、哀悼の意のイチイが飾られる場合を除き、すべての飾り付けが取り外され、鐘にしても終日鳴らないか、たとえ鳴るとしても弔鐘の響きのような厳粛な雰囲気をもっている。

かつて宗教改革前には十字架像や聖別されたパン host、あるいは、キリスト像が聖物置棚に象徴的に埋葬され、復活祭にキリストが復活するまでの間、敬虔な通夜の儀が行われたとされる[12]。

今日ではたいていの教会で、正午から３時までの３時間は礼拝式が行われる。この「３時間」とは、十字架上でイエスの命が絶えるまでの時間の意と伝えられている。礼拝式は祈祷と黙想が主で、その合間に聖書朗読と説教が行われ、There is a green hill far away などの賛美歌が歌われる。

☆「聖金曜日に時計が３時を打つとき唱えた祈りは、何でも叶えられる[13]」という言い伝えがある。

この日、人々は「証人の祭列」と呼ばれる行進を行うが、それは実物大の十字架を捧持して町や村を練り歩いた後、十字架を広場や小高い丘の上に立ててイエスの死を偲ぶものであるが、ここ数十年間益々盛んに行われているようである。

一方この日は厳粛な日であることから、断食と禁欲の日であり、ヴィクトリア朝時代には、家のブラインドを下ろし、タラの煮物からなる懺悔の食事をとる習慣があったし、子供たちのコマ回しやビー玉等の遊技は、すべて禁じられていた。その伝統は今日も残っており、陽気な行事は差し控えられている。ただ、やや賑やかになされる行事とすれば、一部の地域で、キリストを裏切ったとされるユダを象徴的に罰するために、その人形を子供たちがこの日の朝、衆人環視の中で火あぶりの刑にする風習が見られる（Liverpool の波止場地域など)。デヴォン州では陶器類を割砕く行事が行われるが、それは陶器の鋭い破片でユダを切り裂くことができるとかつて信じられたことからの風習である。さらに、サセックス州の各地では「縄跳び祭り Long Rope Day」と呼ばれる、大勢で長い縄を飛び越える行事が行われる。これもユダが縄で首を吊ったことに関わりがある、と言われるようであるが、これには別説もあり、かつての時代、聖金曜日には「春の作物を奮い立たせる」ために、農民たちが先史時代の埋葬塚の上で「跳ね回って」祈願した慣習行事に由来するとも言われるようである[14]。

こうして、聖金曜日には作物の豊饒を願う行事がなされていたとされるが、地域によってではあるが、これに関連する次のようなことが信じられていた。

☆「聖金曜日は菜園の作物、特にジャガイモの植え付けや、パセリの種播きに最適の日である。」これはイングランド南部および中部地方で伝えられるものである。

ところが、イングランド北部地方やウェールズでは、これが全く違ったものとして伝えられており、畑作業どころか土を掻き乱すことさえいけないこととされ、それは恐ろしい災難に見舞われると信じられた。

☆「聖金曜日に鍬、鋤（犂）、砕土機などを使うのはもってのほかである。それをすれば、災厄に見舞われる[15]」と言われた。

1976年、デヴォンシア州では、聖金曜日に２頭の馬と犂を使って畑を耕していた農夫が、池にはまってしまい姿を見せなくなった、との報告がある[16]。これに関連する文芸用例に、George Eliot, *Adam Bede* に次のものが見られる。

> ...had not Michael Holdsworth had a pair of oxen 'sweltered' while he was ploughing on Good Friday? [17]
>
> (...マイケル・ホールズワスは、聖金曜日に畑を耕して、２頭の牡牛を殺されなかっただろうか。)

畑仕事にせよその他の仕事にせよ、聖金曜日に仕事をするのは縁起が悪いとされ、また、この日にした仕事はすべてやり直さねばならないとも言われた。

☆「鉱山や沖合漁業などの危険な仕事をする者は、聖金曜日を特に恐れて働かない。」

☆「鍛冶屋は、聖金曜日には釘一本作ろうとしない[18]。」特に釘は、イエスが十字架に釘付けされたことから忌み嫌われた。一般にこの日には、人々は釘を打つことをも嫌うとされる。

伝承によると、イエスがカルヴァリの刑場に引き立てられていくとき、心ない一人の女が鉢の水をイエスに浴びせかけて、イエスが呪いの言葉を発されたという話があり[19]、また、洗濯をしていた女がその洗濯物をイエスの顔に投げつけ、イエスは「今後、この日に洗濯をする者に呪いあれ！」と言われたとも伝えられる[20]。これらの話に絡まるものとして次のようなことが言われる。

☆「聖金曜日に洗濯をすると、家族の一人が洗い流されて、その年の終わりまでに死亡する[21]。」

☆「聖金曜日に衣類を干すと、血のしみがついてそれを取り込むことになる[22]。」

また、「流す」ことに関連するところから、次のようなことも言われる。

☆「湯桶の石鹸の泡を、聖金曜日まで流さず残しておくと、その家には死人が出る。」

☆「聖金曜日には、3時過ぎになるまでは台所の流しに何も流してはならない。」それは、エルサレムの排水溝には3時までイエスの血が流れていた(る)からだ、とされる[23]。

聖金曜日はまた、貧窮者のために慈善事業を行うにふさわしい祭日とされてきた。慈

善事業は「パンとバンの施し bread and bun Doles」や「墓地での施し Graveside Doles」などである。ここでのbunとはブドウ入りで、その表面に十字印のつけられてある小さな菓子パンであるが、一般にはホットクロスバン hot-cross-bun(s) と言われるものである。

イエスがやはり刑場に引き立てられていくとき、群衆の中の一人がイエスにパンを差し出し、イエスはその人に祝福を与えたと伝えられる[24)]。その故事から次のようなことが言われる。

☆「聖金曜日に焼いたパン（十字架パンとも言われる）は、黴が生えず、保存しておけば家族を災難、特に火災から守ってくれる」と信じられた[25)]。ときには、堅くビスケットのようになった十字架型の菓子が、この災難除けの信から翌年の聖金曜日まで、天井から吊り下げられていたりするとも言われる。

☆「聖金曜日に焼いたパンは、船乗りにとって遭難除けになる。」

☆「聖金曜日に焼いたパンは、保存しておいて万病に効く薬として役立てられた。特に胃腸薬としてよく用いられた。また一般に、子供たちの罹りやすい諸病の治療薬として大いに使われた」ようである。その用い方は、古く堅くなった十字架パンの一部を粉にして飲ませるというものである[26)]。

聖金曜日に焼かれたパンのこのような特別な効能は、ホットクロスバンにも備わっていると信じられた。実は今日でも、聖金曜日に十字形の模様のついたこの菓子パンを食べる家庭が多いとされる。しかし実際に聖金曜日に自家用のパンを焼く家庭は滅多になく、また、昔の朝食時にというよりもお茶の時間に供されることが多い。またホットクロスバンを「縁起のよい食べ物」と見る俗信は、今も根強く残っている。このバンには魔力に似た力があるものと一般に信じられているが、本来これはイングランドの食べ物であり、スコットランドやウェールズではごく最近まで知られていなかった、とされる[27)]。

また聖金曜日は、イエスの不滅性からくるものと思われるが、食品類、特に卵に関して、

☆「聖金曜日に産まれた卵は決して古くならない。クリスマス頃まででも新鮮なままである[28)]。」

☆「聖金曜日に産まれた卵なら、火災の際に火の中心に投げつければ、どんな火災でも消し止めることができる」と災難除けの信まである。

またその他に、恵みの聖金曜日と考えられる信もある。

☆「聖金曜日に赤ん坊の乳離れをさせるのは縁起がよい」とされる。

☆「聖金曜日に赤ん坊を薄着させると、風邪を引かない子になる。」

☆「聖金曜日にできあがった縫い物は、決してほころびない」とも言われる。

一方、聖金曜日に関して、負の信もある。

☆「聖金曜日に生まれる赤ん坊は不運だとされる[29)]。」これは、異文化の中で時として見られる、いわゆる「(イエスの)生まれ変わり」との考え方が全く当てはまらないケースである。

2　キリスト教徒の大祝日、復活祭 Easter

復活祭は、キリストの復活を記念する大祝日であり、キリスト教会の祝日のうちで最も重要なものとされる。復活祭は『祈祷書』*Book of Common Prayer* によれば、「春分３月21日頃以降の満月後の最初の日曜日、ただし満月が日曜日と重なる場合は、次の日曜日」と定められている。祝祭日の女王 Queen of Festivals とも称される復活祭は、毎年日付が変わることになるが、「務めの聖日」また「聖餐式祝日」であることには変わりなく、この祝日には、ローマ・カトリック教会や英国国教会の信徒はすべて教会に行き、聖餐式に出席することが義務づけられている。

この日の朝には鐘が高らかに鳴らされ、各地の聖堂は美しく飾られる。一般に祭壇には復活祭の白百合 Easter lilies を主体にして緑、黄、白の「春」の色合いの花を配する教会が多い。春の再来を祝うことについては、キリスト教が普及する以前から行われていたとされ、復活祭の英語名 Easter は、「春と曙の女神 Eostra」を祝う異教徒の祭りからきた用語で、太陽の昇る東方 East（ゲルマン語 *Ost*）と同族語をなしているとの説［８世紀の歴史家 Bede の説］がある[30)]。キリスト教的意味づけがなされたにもかかわらず、本来の異教的な特色が保持されている風習が見られ、例えば復活祭の早朝丘に登り、イエスの復活を祝して踊りながら日の出を迎えるとか、復活したキリストを「高く掲げて」祝うことにつながりがあるとされる「人の担ぎ上げ」がある。これは同性の仲間数人が、一人の異性を頭上高く３度担ぎ上げたり持ち上げたりするものである。椅子に座らせての場合もあれば、胴上げのように直に上げることもあった。その犠牲者はその後キス責めに遭い「謝礼」を払ってやっと釈放されるという陽気な騒ぎである。これは13世紀頃に始められたらしく、19世紀初期にはまだイングランド北西部やウェールズのごく一部に残っていたようであるが、19世紀末にはほとんど見られなくなったようである[31)]。

伝統的な行事としては、各地の路上球技大会、モリスダンス Morris dance、慈善事業、ビヤ樽フットボール試合、「野うさぎの肉入りパイばらまき式」などが挙げられる。野ウサギは、復活祭を世俗化することで先駆的役割を果たしている「復活祭のウサギちゃん Easter bunnies」の前身とも見られる。しかしながら、復活祭を象徴する食べ物としては、「復活祭の卵」である。内部に新たな生命を秘めている卵は、古くから「春の再来」の象徴とされた[32)]。かつてより今日まで、卵を贈る慣習と卵を用いた遊戯が各地で見られる。卵は赤、黄、緑といろいろに着色され、当日の朝の食膳に供されたり、遊戯用にとっておかれる。

遊戯についてはいろいろであり、「卵探し egg hunt（庭に隠されたゆで卵を探し合う）」、「卵転がし egg rolling（一般には転がる距離を競う）」、「卵のぶつけ合い egg shackling（特にイングランド南西部地域で見られ、印をつけた卵をふるいに入れて激しく揺すり、割れずに残るのを競う遊び）」などである。

復活祭に纏わる迷信、俗信は多様である。

☆「復活祭の日の朝、日の出の時に太陽がキリストの復活を祝ってダンスをする[33]。」

☆「復活祭の日の朝の太陽を、黒いレンズを通して見ると、太陽の表面に旗をもった子羊の像が見える[34]。」

☆「復活祭の日に風が吹くと、一年中風が吹く。」

☆「復活祭の日に雨が降ると、その年は雨が多い。」そのため、草は青々と茂るが、よい干し草はできないと言われる[35]。

☆「復活祭には新しい服を着れば縁起がよい。最低一品は新しい服を着ないと、鳥に頭や服に糞を落とされる。また、（ところによっては）カラスに目玉をくりぬかれる[36]」と言われる。

なお、復活祭に新しい服を着る習慣があったことについては、次のような William Shakespeare, *Romeo and Juliet* の中の一部の箇所や、Samuel Peppy, *Diary* の中の記述が参考になるであろう。

Didst thou not fall out with a tailor for wearing his new doublet before Easter; ... ? [37]
(あなたは仕立屋に立ち寄って、復活祭の前に新調のダブレットを着ようとはしなかったかな…。)

(Lord's day) . ...talking with my wife about her laying out of £ 20, which I had long since promised her to lay out in clothes against Easter for herself, ... [38]
(主の日)。(…妻とその20リブラ [20ポンド] の使途について話し合った。それについては、ずっと以前から私は、復活祭の日のために妻に衣服を新調することに充てようと約束してあった。…)

その他、復活祭に纏わる信には次のものも見られる。

☆「復活祭の日に生まれた子供は、特に運がよい。」

☆「復活祭の礼拝式から保存しておいた聖水 holy water は、種々の病気に卓効がある」と言われる。

[次号「万愚節・五月祭」等に続く。]

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいたAmy Chavez 氏（元、中国短大講師）に、感謝申し上げる。

Notes:

1) "Mothering Sunday," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames

and Hudson, 1986) 172.

2) "Mothering Sunday," Kightly, 172.

3) "Mothering Sunday," Kightly, 172.

4) "Carlings Sunday," Kightly, 67.

5) "Palm Sunday," Kightly, 183.

6) "Palm Sunday, sowing on," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989;Oxford: Oxford UP, 1990).

7) "Royal Maundy, *Maundy Thursday*," Kightly, 196.

8) "John 13. 4-15 & 34," *The Holy Bible*.
34 : A new commandement I give unto you, That yee love one another, as I have loved you, that yee also love one another.

9) "Royal Maundy, *Maundy Thursday*," Kightly, 197.

10) "Royal Maundy, *Maundy Thursday*," Kightly, 197.

11) "Royal Maundy, *Maundy Thursday*," Kightly, 197.

12) "Good Friday," Kightly, 124.

13) "Good Friday, prayer said on," Opie & Tatem.

14) "Good Friday," Kightly, 125.

15) "Good Friday, ploughing on," Opie & Tatem.

16) "Good Friday, ploughing on," Opie & Tatem.

17) George Eliot, *Adam Bede*, Chap. 18 (1959; London: Penguin Books, repr. 1985) 193.

18) "Good Friday," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995).

19) "Good Friday," Kightly, 125.

20) "Good Friday," Pickering.

21) "Good Friday, washing on," Opie & Tatem.

22) "Good Friday, washing on," Opie & Tatem.

23) "Good Friday, washing on," Opie & Tatem.

24) "Good Friday," Kightly, 125.

25) "Good Friday," Pickering. /"Good Friday," Kightly, 125.

26) "Good Friday," Pickering.

27) "Good Friday," Kightly, 126.

28) "Good Friday, egg laid on," Opie & Tatem.

29) "Good Friday, born on," Opie & Tatem.

30) "Easter," Kightly, 105-06. /"Easter," 3-b, *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974).

31) "Easter," Kightly, 106.

32) "Easter," Kightly, 106. /"Easter," 3-b, De Vries; The egg symbolizes the beginning (Spring) of fertility and life.

33) "Easter, sun dancing, or Lamb seen in sun," Opie & Tatem.

34) "Easter, sun dancing, or Lamb seen in sun," Opie & Tatem.

35) "Easter," Pickering.

36) "Easter," Pickering.

37) William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, 3-1, 27-28, The Arden Shakespeare, ed. Brian Gibbons, paperback (1980, Methuen; London: Routledge, 1980, repr. 1994).

38) Samuel Pepys, *The Diary of Samuel Pepys*, February 9th, 1662, Wheatley Edition (Boston : Francis A. Niccolas, 1893).

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans (14) IV The Year's Celebrations —Part 3 : On the Customs and Superstitions of Ash Wednesday, Mothering Sunday, Carlings Sunday, Palm Sunday, Maundy Thursday, Good Friday and Easter

Kunihiro FUJITAKA
Faculty of the College of Life Science,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 30, 2005)

We know that when people lead a customary life every day, they are apt to become stereotyped. In order to keep their bodies and souls more active, they need some pleasant events, or festivals, in their life which will give themselves moderate tension, much vigor, and above all, lots of fun.

It is very significant for people to take part in various festivals in the society to which they belong. Their participation to them will mean that they can have true feelings about life in common as the members of the community where they live every day. As a result, they come to receive and maintain the culture and tradition of the community. In other words, it means that they will enhance the culture and tradition of the nation.

In the present writing, we would like to speculate on the customs and superstitions of some festivals — Ash Wednesday, Mothering Sunday, Carlings Sunday, Palm Sunday, Maundy Thursday, Good Friday and Easter—and exemplify some practical usages from English literary works. And in this speculation, we would also like to pay special attention to examining historical and cultural aspects of those festivals.